

「はっ……はえ……ああ……は……」



「くくくく、もっと舌を……せ。」

「お……んお……あ……」



「無駄な……事を……」



「は……おー？、あ……えい……？、あっ♡、あっ♡。」



セウ
セウ

「ん、ん、んむっ…
んちゅんむ…ぢゆる、ぢゆる。♡
ぢゅ。♡♡♡」

キキキキ!

キキキキ!


ビクン!



「ぶあ...はあ、はあ、はあ...」

びびびび

びびびび




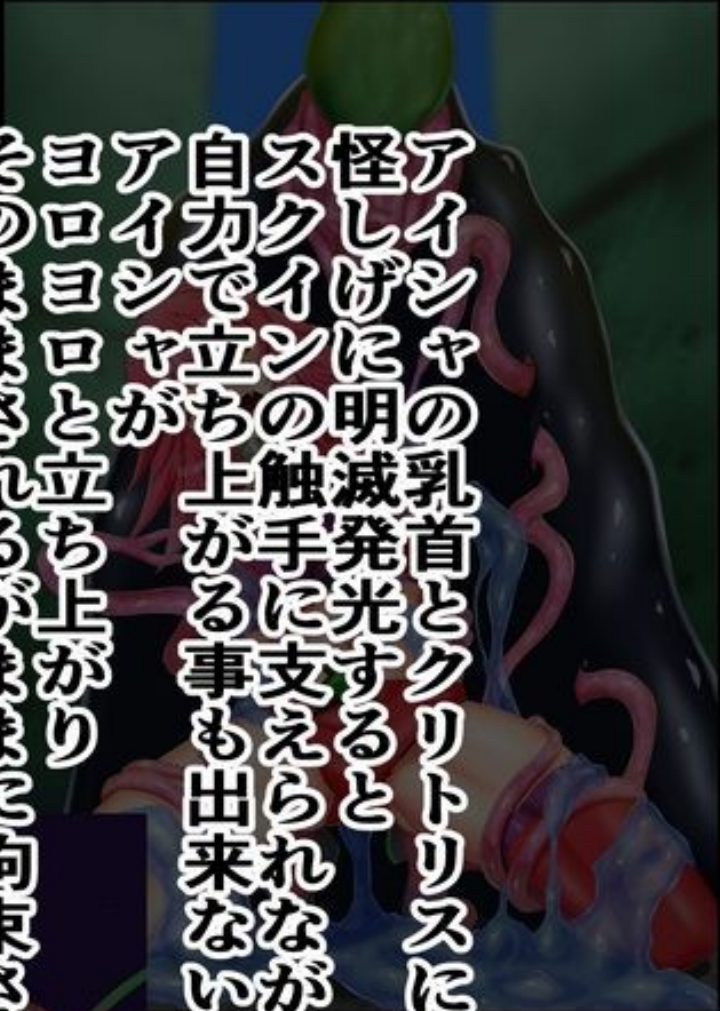
ある裏路地での奇襲、

アイシヤはマーゴ、スクインの作った怪しげな肉種を胸のタロスに取り付けられた。

肉腫はタロスに何かの効果を及ぼし、
それによりアイシヤの体は著しい異常を来たし、
その戦闘力はおるか体の自由すらままならない状態になってしまった。

その後肉腫は絶えず明滅を繰り返し、
次第に緑色の外殻の様なモノが剥がれ始め中の肉部分が
タロス全体を覆うように広がり遂には全体を包み込んでしまう。





アイシヤの乳首とクリトリスに取り付けられたリングが
怪しげに明滅発光すると
スクインの触手に支えられながらではあるが
自力で立ち上がる事も出来ない状態だった筈の
アイシヤが
ヨロヨロと立ち上がり
そのままされるがままに拘束されていく。



「…はあ、はあ…。」

「ん？、お姉ちゃん動けるの？」

「ククク、ヨイツに取り付けた…ハッキングリングの効果…だ。」

「なにそれ？…ああ、この前言ってたやつ？」

スクインに言われ一旦アイシヤから離れていたスライムだが、
アイシヤが動いている事を不思議に思うと、
スクインがその事について説明を始める。

セクシー

「このリングを取り付けられた者の体は……俺の人形になる、
但し、このリングだけでは……駄目……だ。」

「んふあっ♡♡!?!」

突然アイシヤから驚きを含む喘ぎ声が漏れる。
アイシヤの体から歪な形の男性器のような形状の触手が現れ、
アイシヤの膣内へと挿入された為だ。

セクシー

「んっ♡、やめっ…奥…は、あうあっ♡♡!」

ズクッ!

セクシ

十分に濡れていた秘所に
粘液に塗れた異形の陰茎はすんなりと最奥まで到達する、

そして先端の触手群が子宮口を丹念に
解すように蠢きこじ開けようとしてくる刺激に
アイシヤの体は否が応でも反応してしまう。



「んあっ……これ……あ……あっ……あ……」

こじ開けたアイシヤの子宮に
スクインの陰茎触手から粘液が吐き出される。

最奥に吐き出された粘液は奇妙な熱をもち
アイシヤの体に浸透していく。

その感覚にビクビクと肢体を痙攣させるアイシヤ。

ビクビク

「リングは体内に取り込んだ
俺の体液と反応……して効果を露わ……す、

簡単に言えば……体液を注げば注ぐほど……
人形としての完成度は……あがるの……だ。」

「はうあ……んく……ふう……。」

「へ〜でも人形って面白いの?。」

興味があるのか無いのか判別の付かない質問が
ゲル状の物体から発せられる。

「ふん、貴様ごときにはわからんだろう……が、
マ〜ゴハンターでそれが……出来るといいう事が偉大……なのだ。」

セウ

「まあ、気持ちよさそうだからいいけど、
じゃあボクももう参加するよ?。」

自身の発明に興味を示さぬスライムにイラつくスクインだが、
スライムはどこ吹く風で再びの参戦を表明する。

「俺の邪魔をするのは……許さん……ぞ。」

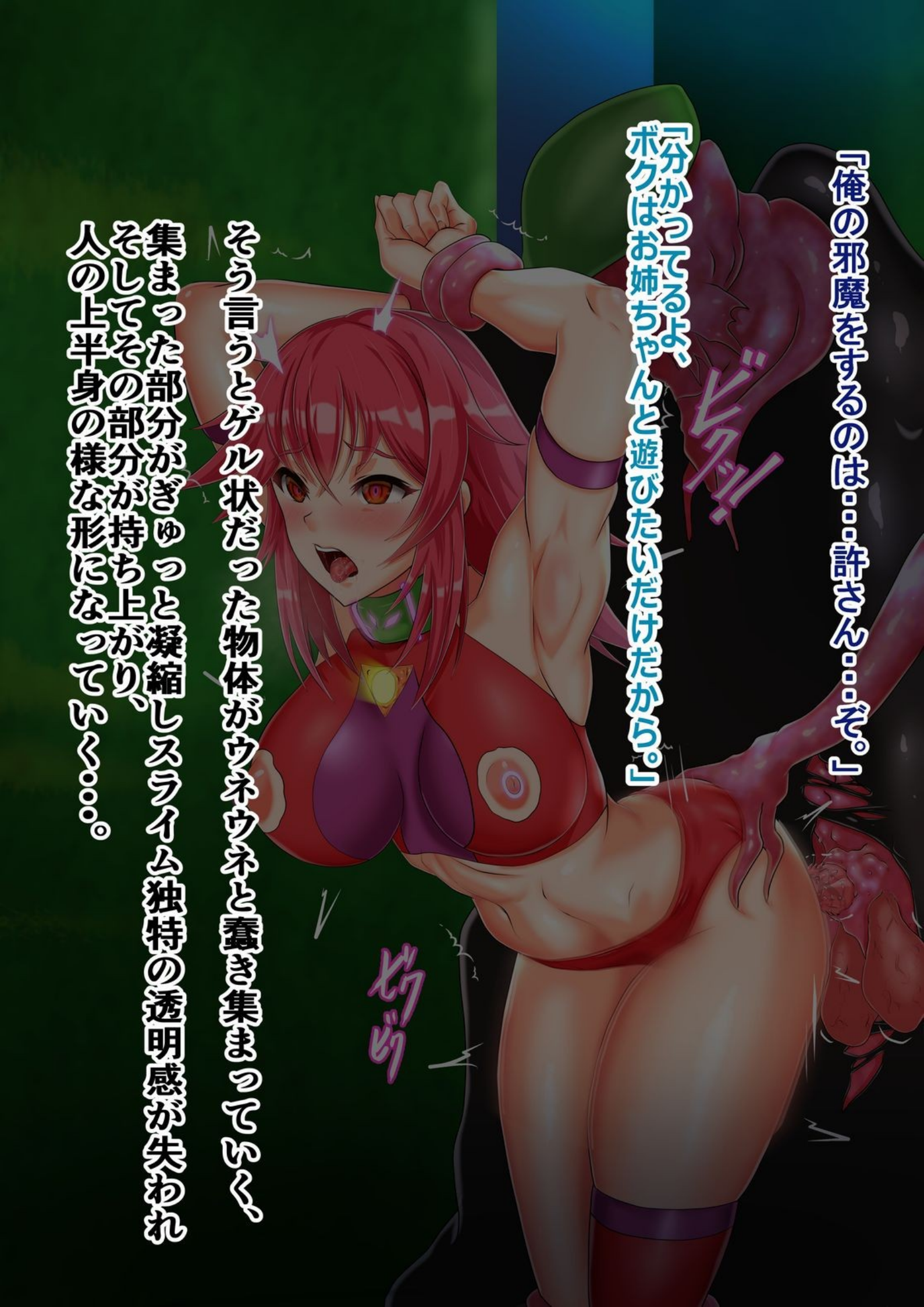
「分かってるよ、ボクはお姉ちゃんと遊びたいだけだから。」

ズグズグ

ズグズグ

そう言うとゲル状だった物体がウネウネと蠢き集まっていく、

集まった部分がぎゅっと凝縮しスライム独特の透明感が失われ
そしてその部分が持ち上がり、
人の上半身の様な形になっていく……。



「どうっ？ボクもこういふ事が出来るようになったんだよ、前に合った時より凄いでしょ！」

自慢気に語るスライムだが、以前在ったたという言葉が引つかかったアイシヤ。

（前…スライム…あ…）

「んっ、あな…た、海…で、あっ♡あっ。」

「覚えててくれたんだ！、ボク嬉しい！」

ムクビ

アイシヤは昨年海で襲われたスライムの事を思い出す。あの時のスライムは全て消滅させた、そう思っていたがどうやら生き残っていたようだった。

（これは……まずいかも。）

アイシヤの中で現在の状況の危険度が上がる、

時折、特定のマーゴハンターに

異常に執着するマーゴというものが現れる事がある。

主な原因は

逃してしまつたマーゴがその後復讐の為にとというのが大半だ。

声色から憎しみの感情は伺えないが、

かかつてない異常事態を迎えている自分の前に、

かかつて倒したと思つた敵が

明らかに以前よりも高い能力を持って目の前にいるのだ。

クウ
ビ

「でねーボクも色々出来るようになったよー、
つて聞いてる?。」

「んくう♡!、んあぁあ…はっ…はっ…はっ…。」

先程からスライムは
自分がこれまでどう
アインヤに自慢気に話
当の彼女は侵食粘液の
スライムの言葉など耳
入っつていなかっただ
が、入れたか等を
震えて

ムクビ

びゅるん

びゅるん

ズグズグ



「んもーっ！、お話してるんだから邪魔しないでよ！」

「知った……事が、俺は好きにすると聞いた……だろ。」

「むーっ！、いいよ、じゃあボクも好きにするから。」

自慢話を聞いてもらえなくて不満なのか
スライムは頬を膨らませ抗議
するが、スクインはそれを一蹴する。

それに更に不満を募らせるスライムだが
相手にしても無駄と思っただのか、
自分のやりたい事を優先させることにした。

ムクビ

「んっ、何…を…んふ…あふ♡…。」

スライムがアイシヤの体に取り付き、
そこから全身に行き渡るように薄く薄く広がっていく。

「できた〜。んふふ〜ピシチピチ〜。」



ピシチ

んふふ

んふふ
ピシチ
ピチ

ピチ

広がったスライムがアイシヤの全身に行き渡る。彼女の首から下は服の上も下も、手足の指先に至るまで完全にスライムに包まれていた。

表面はまるでラバーの様な質感を持ち、極薄故に全てが透けている。

そんなラバーに包まれたアイシヤの腋にスライムの指先がそっと触れる。

「んあっ♡!、あうっ♡、んんっ♡♡♡!。」

「あはっ、相変わらずここが敏感なんだね。」

んんっ

んんっ

んんっ



(はぁ♡……今の……お尻……♡)

♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

スクイン

中級マーゴ、優秀な頭脳を持ち、様々な発明品を作ってきた。だが過去に作った発明を他のマーゴに騙され横取りされて以来、他者とのコミュニケーションを嫌うようになっていった。

同時期に悪評も流された事で、二期姿を晦ませていた事もあるが隠れて他のマーゴを見返す為の様々な研究を進めていた。

研究にある程度の成果があったのか、表舞台に姿を現すが、1人ではなにかと手が回らないため、ひよんな事から出会ったスライムと協力関係を結んでいる。

生物を人形のように操る体液を持つ能力がある、じかじ効果がとても薄いという欠点があるが、その欠点はボディバックという技術を発明し、克服している。

常に黒い粘性の物体を纏っているが中に本体があり、変幻自在の触手を操る。

実は本体は著しく戦闘能力が低い。

